

福島研究開発・評価委員会における提言と機構の措置(事後評価)

提言	機構の措置
環境動態研究は、情報を得るために長期間に亘る取り組みが必要と考えられるため、F-REI ヘリソースを移管しても、継続して研究に取り組んで頂きたい。	これまで展開してきた環境動態研究は、令和7年4月より福島国際研究教育機構に研究リソースを移管し、研究を継続いたします。特に、福島国際研究教育機構ではよりステークホルダーに研究成果を共有することに力点を置き、環境アセスメントの視点を取り入れた研究の展開を予定しています。JAEA としてもこの活動に環境放射線モニタリングや被ばく評価の技術を生かして積極的に貢献していく所存です。
具体的な研究成果としてキノコへのCs移行のメカニズムについて、植物のメカニズムとは比較し、新たな知見を見出すなど興味深い成果も見受けられます。一方で、大柿ダムにおけるアンモニウムイオン存在下におけるCsの溶出性に関する検討では、生物濃縮など別のメカニズムの組み合わせによりさらに深い考察が必要であると考えられ、今後のさらなる研究に期待いたします	
課題設定の方法の検討、住民の安心感情勢等の評価方法、リスクコミュニケーションのこれまでに得られた知見からさらなる展開に進まれることを期待します。	
得られた情報は、関連の自治体、住民の方々に受け手側に合わせた形で整理し、提供している。また、情報提供サイトを構築し、広く分かりやすい情報発信に努めている。情報発信については、情報提供サイトの存在、有用性を上手くアピールすることで一層の情報普及が図れるものと期待する。	情報発信のプラットフォームであったQ&Aサイトについては、令和7年4月より福島国際研究教育機構での運用を予定しています。このサイトの機能拡張についてはJAEA も積極的に関与し、さらなる成果普及に努めてまいります。
新たに得られた知見は、福島県内だけでなく国内外に広く知ってもらふ必要があろう。特に、原子力分野の専門家であっても、環境動態についてそれほど詳しくない方々に対し、これらの研究成果を知ってもらふ機会があると良いと思う。	令和7年4月より福島国際研究教育機構での研究の柱として、2030年の発行を目指す環境動態レポートの作成がアサインされています。JAEA としてもこれまでの研究展開の経験をそのプロジェクトに積極的に反映し、より成果普及に貢献していく所存です。